

北海道開発局旭川開発建設部御中

私たちは11月8日に天塩川流域委員会に対して以下の3点について申し入れをしております。

1. 議事要旨をやめて、発言を全文掲載する議事録を作成すること。
2. 寄せられた意見に真摯に対応し、問題点を徹底的に検討するために専門部会を設置するなどして、委員会の運営を改善すること。
3. 次の委員会で申し入れに対する回答を図ること。

再三の申し入れにも関わらず、未だに改善されること無く委員会が進行されております。そこで、我々は

1) 議事要旨では不十分であり、全文議事録が必要という考えで第9回委員会傍聴記を作成しております。第10回委員会で第9回委員会議事要旨が公表されたので、これらを比較・検討し、やはり全文議事録が必要である等の意見書を送付させていただきました。

また、貴局へは

2) 第10回委員会傍聴記から、第10回流域委員会で論議された問題点について摘し、我々の根拠を記した上で、別紙の公開質問状を送付させていただきます。

2月15日までに下記の回答先までご回答くださるようお願い申し上げます。

2006. 2. 1

(社)北海道自然保護協会、サンル川を守る会、下川自然を考える会、 名寄サンルダムを考える会、北海道の森と川を語る会、自然・文化ネットワーク、遊楽部川の自然を守る会、大雪と石狩の自然を守る会、旭川・森と川ネット21、環境ネットワーク旭川・地球村、(社)北海道スポーツフィッシング協会

回答送付先：060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル 5-6F

社団法人 北海道自然保護協会 会長 佐藤 謙

TEL/FAX 011-251-5465

北海道開発局旭川建設部への公開質問状

質問 1

名寄市上流の治水基準点である真薫別において、史上最大であった昭和56年の洪水は堤防を越えていない。その後、25年間、開発局による河川改修が進んでいる現在、サンルダムがなくても、同等の大雨が降ったとき、天塩川は名寄市周辺ではまったく溢れないと推定される。

最近、天塩川河川整備計画HPで「サンルダムの水位低減効果」という図がアップされた。名寄川のサンル合流点から天塩川合流点に間で最大約110cm、最小約40cmの低減効果があると述べているが根拠がまったく示されていない。水位は、当然、河道幅によって異なるので、開発局がいう水位の低減効果とは、それぞれ、どの地点での算定なのかを、河川断面図とQ-H図を示して明らかにしていただきたい。

また、開発局は、添付資料に示したごとく、サンルダム建設事務所所長名で地元団体に対して、名寄市に最も近い治水基準点である真薫別地点でのサンルダムによる水位低減効果は20cm、天塩川全体の治水基準点であるポンピラ（誉平）での水位低減効果は10cmであると明言している。この根拠についても、同様の資料をつけたうえで示していただきたい。

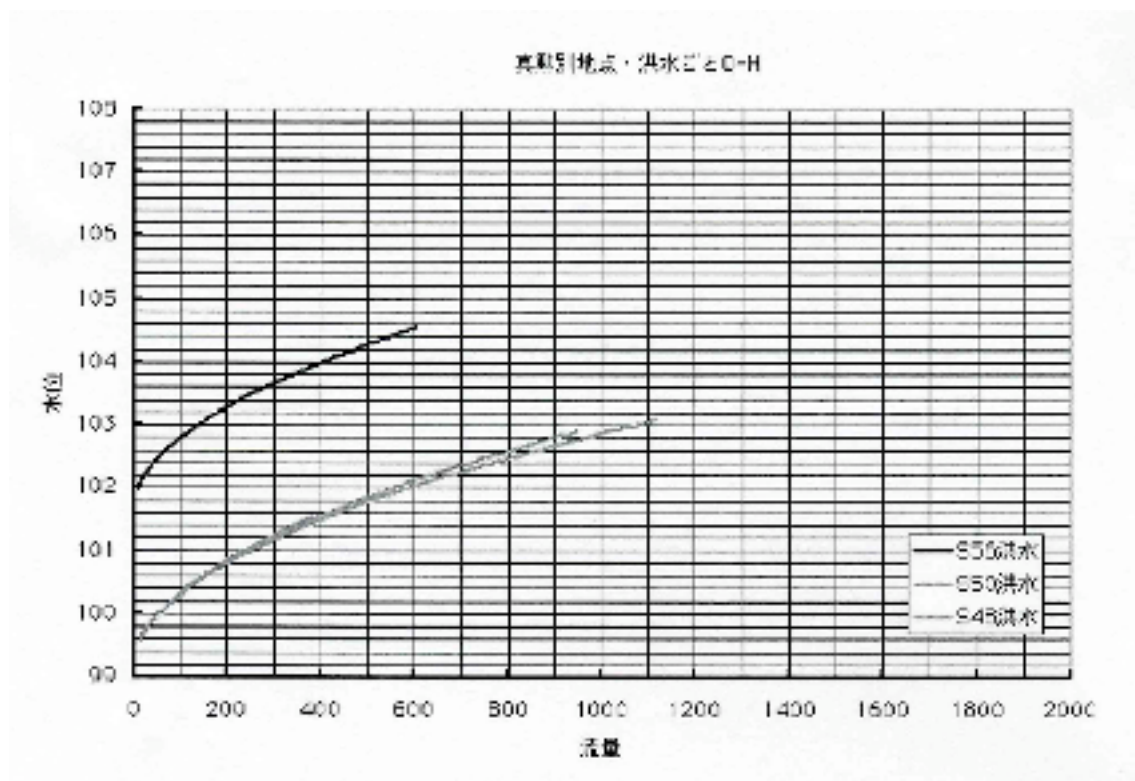
質問 2

二風谷ダムでは魚道によってサクラマスが遡上して産卵しており、魚道をつけたことで二風谷ダムによるサクラマス資源への影響はない、と開発局は主張しているが、これまでに出されている資料（説明資料2参照）では、二風谷ダム完成後、沙流川水系のサクラマス資源は激減している。開発局は、二風谷ダムの魚道によるサクラマス資源の維持効果について、その調査方法、上流でのスモルトの放流量などを含め、ダム建設前と建設後のサクラマス資源量の比較を具体的な数字で示していただきたい。

説明資料 1

下の図は、開発局の資料からつくった真熟別におけるQ-H図（水量と水位の関係）である。昭和56年8月の水位だけ2.4m高くなっているのは不自然である。観測点が上流側に移動したのではないかと考えられる。このときの水量は約 $600\text{m}^3/\text{s}$ で水位は約104.5m、一方堤防の高さは107～108mであり、この場合は氾濫しない。整備計画では真熟別の目標流量は $1500\text{m}^3/\text{s}$ である。昭和56年8月のQ-H図で $1500\text{m}^3/\text{s}$ の水位を推定するのは難しいので、昭和48年と50年の図を外挿してみると、このときは水量0から $1500\text{m}^3/\text{s}$ までの水位差が3.6mなので、昭和56年に当てはめると105.6mとなり、やはり外水氾濫は起きないと推定される。

天塩川整備計画では、当面20～30年間の治水の目標流量を史上最大であった昭和56年のピーク流量としている。このときの真熟別の計画高水位は106.32mである。昭和56年のピーク流量を氾濫することなく流せているのであるから、サンルダムがなくても、氾濫は起きないことは明らかである。開発局はサンルダムが名寄市の治水のために必要であることと強調しているが、名寄市にもっとも近い治水基準点である真熟別でみた場合、サンルダムがなくても、目標流量は処理することができるのは明らかであり、サンルダム必要がないといえる。



注；グラフ上から、S56年、S50年、S48年洪水の曲線

説明資料 2

既存の資料に基づき平均生息密度（尾/m²）の経年変化を図に示した。これを見ると、二風谷ダム竣工の1997年以降生息密度が減少しているのがわかる。二風谷ダム竣工の1997年のデータは、ダム前か後か判断できないので除いて考えると、1990-1996年平均密度は0.059尾/m²、1998-2004年平均は0.023尾/m²なので、二風谷ダム建設後に密度は半減していることになる。また、上流ではスモルトを大量に放流しているので、その影響を考慮して検討しなければならない。

